

# カウンセラー志望者の志望動機について\*

—自我同一性、過去経験及び進路選択からの分析—

塩尻 智也\*\*・福田 廣

On the Counsellor Aspirant's Motive

—Analysis from Aspects of Ego identity, Past experience, and Career choice—

SHIOJIRI Tomoya and FUKUDA Hiroshi

(Received February 10, 2005)

キーワード：カウンセラー志望者、自我同一性、過去経験

## 【問題および目的】

近年、斎藤(2003)や檜村(2003)が指摘するように、心理学的な概念で社会の現象を説明する動きが多くみられるようになった。実際、大学でも心理学を学ぼうとする学生が増加している。そのような現象の指標として、臨床心理士資格認定指定大学院の増加(平成16年4月4日現在、全国で114校)が挙げられる。

そのような実状の中で心理学を学ぶ大学生についての研究には現在のところ、心理学に対するイメージや心理学関連の講義を受講する動機といった大学生の心理学観に関する研究がいくつかみられる(松井(2000)、江尻(1999)、東・橋本・加藤・藤本(1994)など)。それらの結果から心理学を学ぶ動機あるいはこんなことが学べるだろうというイメージは「自他の心の理解」「心理(性格)検査」「カウンセリング」などがほとんどであり、臨床心理学の領域を期待するものが多い。また、秋田(1995)によると同じ心理学を学ぶ学生でも専攻によって心理学を学ぶ動機に違いがあるという。具体的には心理学専攻では将来の仕事に結び付けて考えるが、それ以外の専攻の学生ではむしろ教養の一つとして心理学の知識を得ようと考えているという。

このような知見や今日の臨床心理士資格認定指定大学院の増加などをみると心理学を学ぶ学生の中でもカウンセラー志望者の研究を行う必要性があろう。

馬場(1998)は自らの経験や講義に参加する学生の様子からカウンセラー志望者の増加を指摘し、「人の役に立ちたい」「人助けがしたい」といった志望者の動機は内面の問題・自己感覚の不確かさ・将来への不安などの悩みを背景としていることを指摘している。しかし、これらの知見は数量的に検証されたわけではない。

量的な調査では、渡部・東海林・椿堂(2001)、増田・外島・藤野・小川(2000)の研究がある。渡部らはカウンセラー志望者のパーソナリティ・過去のネガティブ経験としていじ

\*本研究は第一著者が提出した平成14年度山口大学教育学部卒業論文を加筆・修正したものである。

\*\*山口大学大学院教育学研究科

め経験の検討を行っており、カウンセラー志望者にはそうでないものよりも有意にいじめ経験が多いということを見出している。しかし、渡部らの研究ではネガティブ経験としていじめ経験を採用しているが、その選択の根拠も明確ではなく、一口にネガティブ経験といっても、もっと多くの事象が考えられるのではないだろうか。また増田らはカウンセラーを含む対人援助職(教育・医療・福祉・心理)の志望者・資格取得予定者のパーソナリティの比較検討を行い自己開示・共感性・イラショナルビリーフなどで非志望者との間に有意な差を見出し、パーソナリティにおいて差を確認できなかった渡部らの研究と矛盾している。この矛盾点は渡部らが検討したパーソナリティの側面と増田らが検討した側面の違いが反映したものと考えられる。

以上をまとめると、カウンセラー志望者に関するこれまでの研究では以下のような問題点が指摘できる。

- ①カウンセラー志望者の志望動機の中身が詳細に検討されていない
- ②自己感覚などの自我同一性に関連する領域では量的研究が行われていない
- ③パーソナリティの側面はその多様さもあって一貫した結果が得られていない
- ④過去のネガティブな経験については十分にまとまって検討されていない

本研究では以上の問題を踏まえつつ、カウンセラー志望者の志望動機を自我同一性および過去経験の側面から検討する。また、カウンセラー志望者の特徴をカウンセラー志望者とそれ以外の職種を希望する者との比較によって論じることとする。

## 【方法】

**対象者** 調査対象者は山口大学・教育学部学生および大学院生147名(男性50名・女性97名)であった。専攻別でみると心理学専攻の学生が54名(大学院生を含む)であり、全対象者の37.6%であった。

**手続き** 調査は対象者に研究協力のお願いと研究の説明をし、「あまり考えずに答えるように」という教示与え、質問紙に回答させた。講義時間中に集団に実施するという形式で行った。なお所要時間は15～20分であった。

**質問紙** 質問紙は以下の質問項目によって構成されている。

- ①自我同一性に関する項目は長尾(1989)による自我発達上の危機状態尺度(A水準項目・26項目)を用いた。質問に対して「5：当てはまる」から「1：全く当てはまらない」までの5件法であった。
- ②ネガティブ経験に関する項目は渡部・東海林・椿堂(2001)によるいじめ経験に加え、川瀬・松本(1997)のライフイベント・スケールを参考にして作成した20項目に対して「1：経験していない」「2：経験したが悩んでいない」「3：経験して今も悩んでいる」の3件法で回答するようにした。
- ③教師／カウンセラー志望の有無に関する項目は教師・カウンセラーになりたいかどうかについてそれぞれ「是非なりたい」から「全くなりたくない」までの5件法であった。さらにカウンセラー志望について「是非なりたい」および「なりたい」と回答した者にはその動機としてカウンセラー志望の動機に関する選択肢(20項目)の中から自分にとって最も重要な動機・二番目に重要な動機・三番目に重要な動機をそれぞれ選んで回答させた。
- ④対象者の属性に関する項目は対象者の年齢・性別・所属コースについての質問であった。

## 【結果】

### (1) カウンセラーの志望動機について

それぞれの動機について対象者が選択していれば1点、選択していなければ0点と得点を与え集計した。その得点を用いて各動機間の非類似度を算出し、その得点をもとに多次元尺度法によって二次元上にプロットしたものがFig.1である。二次元上に配列された動機の内容から次元1を学研的—実践的次元、次元2を対他—対自次元とした。なお「動機13/社会的に認められているから」は選択数が0のため分析から除外した。また、これらの動機の得点についてクラスター分析も合わせて行ったが、そこでの分類が単純な選択—非選択による分類になってしまったため、説明のしやすさから多次元尺度法による分析結果を採用した。

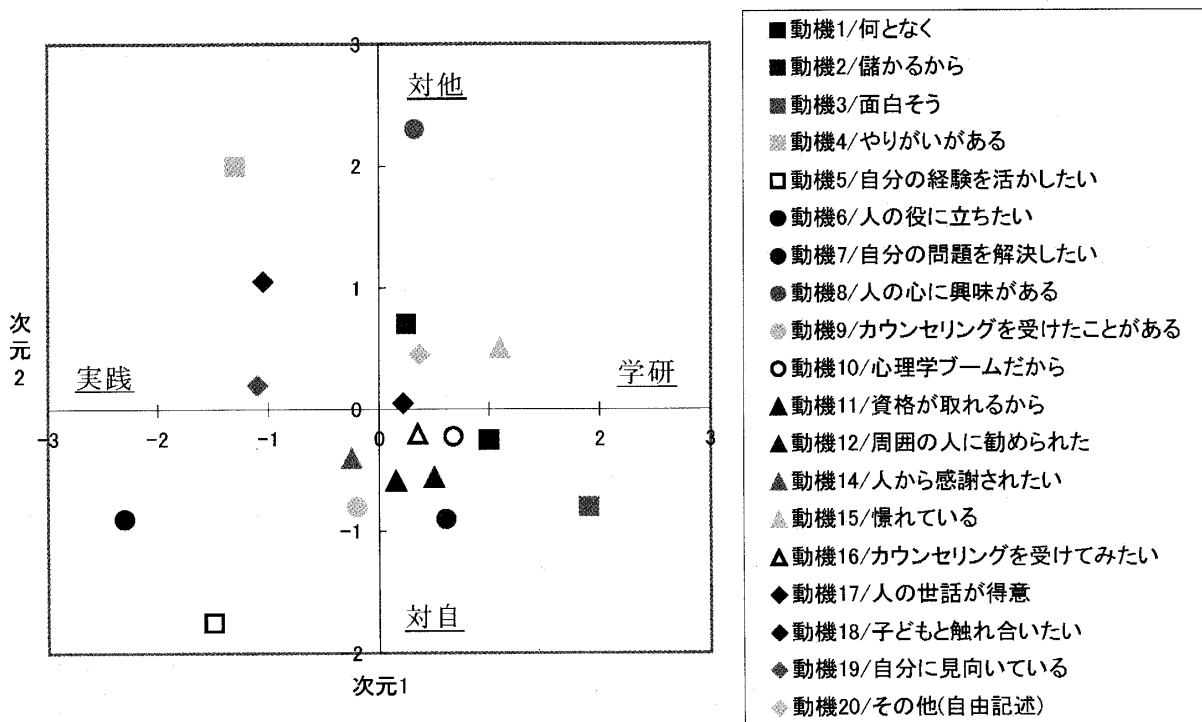


Fig.1 非類似度による志望動機の配置

### (2) 各尺度の因子構造

自我同一性に関する尺度(26項目)について因子分析を行った。固有値1以上で6因子を抽出し、バリマックス回転をし因子負荷量が.350以上のものを採用した。その結果、21項目が残り、第1因子が「同一性拡散因子」、第2因子は「決断力欠如因子」、第3因子は「自己開示対象の欠如因子」、第4因子は「親に対するアンビバレントの感情因子」、第5因子は「親に対する依存と独立因子」、第6因子は「実行力の欠如因子」であった。6因子の累積寄与率が44.1%であった。

また、過去経験に関する尺度(20項目)について因子分析を行い、固有値1以上で5因子を抽出し、バリマックス回転をし因子負荷量が.350以上のものを採用した。その結果、16項目が残り、第1因子が「学校不適応」、第2因子は「内的葛藤」、第3因子は「家庭の危機」、第4因子は「友人関係」、第5因子は「喪失体験」であった。5因子の累積寄与率が35.4%であった。

### (3) 希望進路および志望動機による対象者分類

対象者に対して「カウンセラーになりたいか」と「教師になりたいかという」という2つの質問を用いて希望進路による分類をすると教師・カウンセラーの両方になりたいと思っている「両方群」、教師になりたいと思っている「教師群」、カウンセラーになりたいと思っている「カウンセラー群」、どちらにもなりたくないと思っている「その他群」の4群に分類された。

また、「カウンセラーになりたいか」という質問に対して「是非になりたい」「なりたい」と回答した者をカウンセラー志望者とし、カウンセラー志望の動機の得点を用いてクラスター分析(ウォード法)した結果4群に分かれた。それぞれのクラスターを第1クラスターは志望動機に「興味がある」「面白そう」と回答する「興味群」、第2クラスターは志望動機に「やりがいがある」と回答したため「やりがい群」、第3クラスターは志望動機で「自分の経験を活かしたいから」と回答した「経験群」、第4クラスターは志望動機で「人の役に立ちたいから」と答えた「役立ち群」と命名した。

### (4) 対象者分類と各尺度との関連

#### ①希望進路による分類と各尺度との関連

希望進路の分類における自我同一性尺度の下位因子の得点について分散分析を行ったところTable 1のような結果となり「決断力欠如因子( $F(3,146)=3.03, p<.01$ )」と「自己開示対象の欠如因子( $F(3,146)=3.93, p<.01$ )」の2つの因子で有意な差が見られた。

また、過去経験の尺度の得点においても同様に分散分析を行ったところTable 2のような結果となり「学校不適応( $F(3,146)=5.60, p<.01$ )」「内的葛藤( $F(3,146)=2.77, p<.01$ )」「喪失体験( $F(3,146)=18.95, p<.01$ )」で有意な差が見られた。

Table 1 希望進路による分類における各尺度得点の平均値(SD)と分散分析結果

	両方群 (n=10)	教師群 (n=69)	カウンセラー群 (n=42)	その他群 (n=26)	分散分析 Tukey 法 による多重比較
決断力欠如	2.53(.82)	2.80(.70)	2.95(.85)	3.23(.70)	その他>教師・両方
自己開示対象の欠如	1.60(1.07)	2.20(1.06)	2.34(1.21)	2.83(.96)	その他>教師・両方
学校不適応経験	1.60(.89)	1.66(.42)	1.41(.30)	1.79(.51)	その他・教師>カウンセラー
喪失経験	1.60(.39)	2.62(.87)	1.71(.67)	2.85(.81)	その他・教師>カウンセラー・両方
内的葛藤経験	1.83(.53)	1.61(.51)	1.90(.55)	1.78(.63)	カウンセラー>教師

#### ②志望動機による分類と各尺度との関連

カウンセラー志望者の4群における自我同一性尺度および過去経験の尺度の下位因子の得点について分散分析を行ったところTable 2のような結果となり、自我同一性では「決断力欠如因子( $F(3,66)=2.84, p<.01$ )」と「自己開示対象の欠如因子( $F(3,66)=4.20, p<.01$ )」の二因子において有意な差が見られた。過去経験では「学校不適応( $F(3,66)=2.93, p<.01$ )」のみ有意な差が見られた。

Table 2 志望動機による分類における各尺度得点の平均値(SD)と分散分析結果

	経験群 (n=18)	興味群 (n=12)	役立ち群 (n=17)	やりがい群 (n=20)	分散分析 Tukey 法 による多重比較
決断力欠如	2.87(.84)	3.39(.79)	2.93(.72)	2.58(.71)	興味>やりがい
自己開示対象の欠如	2.25(1.27)	3.08(1.28)	1.94(.75)	1.78(.92)	興味>役立ち・やりがい
学校不適応経験	1.54(.34)	1.38(.26)	1.45(.24)	1.28(.26)	経験>やりがい

### 【考察】

#### (1) 志望動機に関する考察

集計の得点と多次元尺度法によるプロットの結果から、カウンセラー志望の動機として以下の様に分類することができる。

- 第1象限：「人の心に興味がある」「憧れている」 ⇒ 「他者探究的動機」
- 第2象限：「やりがいがある」「子どもと触れ合いたい」 ⇒ 「外的利得動機」
- 第3象限：「人の役に立ちたい」「自分の経験を活かしたい」 ⇒ 「自己投入的動機」
- 第4象限：「自分の問題を解決したい」「面白そう」 ⇒ 「内的利得動機」

馬場(1998)や渡辺(2003)などの「自己」にまつわる諸問題の解決がカウンセラーの志望動機やその背景になっているという指摘は、これらの分類の一部を形成していることがわかる。ただし、これらの指摘は「人の役に立ちたい」という動機ですら「自己」に纏わる問題の解決を背景として形成されていると述べられているが、「人の役に立ちたい」という動機が「自分の問題を解決したい」という動機とは異なる象限にプロットされていることから相互の関連は単にどちらかがどちらかの背景になっているという解釈ではなく更なる詳細な検討が必要と思われる。

同時に、カウンセラー志望者の分類が経験群・興味群・役立ち群・やりがい群というように上記の分類と必ずしも一致しなかったことから、この分類上の次元軸が必ずしも直交しない可能性があるため、多変量解析の諸技法を適用しての比較検討が必要であろう。

#### (2) 希望進路について

カウンセラー志望の有無・教師志望の有無によって対象者を分類し、各尺度との関連を見てきたが、自我同一性の下位尺度に見られる結果は、本研究の主たる目的とは離れるが、教師にもカウンセラーにもなりたくないその他群が教師群あるいはカウンセラーと教師の両方になりたい両方群よりも決断力が低く、自己開示対象が相対的に少ない結果となった。これは就職の準備性の面で決して有利とは言えず、どちらにもなりたくないというよりも何になりたいかわからないといった進路未決定と見ることができる。

一方、過去経験の尺度においては「学校不適応経験」「喪失経験」はカウンセラーを志望する群(カウンセラー群・両方群)よりもカウンセラーにならない群(その他群・教師群)に多く、「内的葛藤経験」は教師群よりもカウンセラー群に多かった。これらのことは、上述のカウンセラー志望動機に「自己の問題の解決」があることと関連させて、カウンセラー志望を規定する要因としては「学校不適応」や「他者の死」よりも「内的葛藤」と考え、カウンセラー志望者の内省力の高さと解釈することも可能だろう。しかし、実際にこのことを検証するには判別分析など、さらなる分析が必要である。

これらの内的葛藤による迷いや傷つきを補償する為の進路選択だとしたら馬場(1998)や

渡辺(2003)が指摘するような問題点もあろう。逆にこの内省力の高さを活かしフォーカシングや逆転移の解釈を実践し、多くの人に援助の手を差し伸べていくことが期待される。

### (3) カウンセラー志望者について

志望動機によってカウンセラー志望者を分類すると、上記の志望動機の分類がそのまま適応されるのではなく、それらが統合されたり分裂したりしていた。志望動機それぞれの特徴としては、興味群は役立ち群・やりがい群よりも決断力や自己開示対象を持たない結果となった。また、経験群はやりがい群よりも学校不適応経験が多かった。前者の結果において興味群は職業選択において興味関心が先行し、職業について他者と話し合う機会を持たず、あやふやな決定だったのだろう。ここから同じカウンセラー志望者でも自我同一性の獲得にばらつきがあり、志望動機もそれらと無関係ではないことが指摘できる。また、経験群が活かしたいと思う経験とはこの結果から「学校不適応経験」というものが大きくその位置を占めているのではないだろうか。このような経験の違いは、あるいは将来カウンセラーとしてそれぞれの臨床の現場に出るときのフィールドの違いとして現れてくるかもしれない。

### (4) まとめ

本研究では、カウンセラー志望動機は多様であり、それらは志望者の自我同一性や過去経験と無関係ではないことが示された。また、カウンセラー以外の進路を目指す人々との違いも見られた。これらのことがこれ以降のカウンセラー養成のあり方とどのように関わっていくのかは、定かではない。しかし、バックボーンの違い多くの志望者を一様に扱うことで見逃されていくものも少なくないと考えられることから、よりきめの細かい養成システムの構築が望まれる。

## 【引用文献】

- 秋田喜代美 1995 心理学に対する授業観と質問行動：一般教育課程と心理学専攻の比較検討 立教大学心理学科研究年報 38 25-38.
- 馬場禮子 1998 カウンセラー志望者と自己形成 現代のエスプリ 372 50-55.
- 江尻桂子 1999 心理学を学べば何がわかるのか—大学生の心理学観と、その心理学教育による変化— シオン短期大学研究紀要 39 51-59.
- 東正訓・橋本尚子・加藤徹・藤本忠明 1994 大学生の心理学観の構造—2—心理学者との比較 追手門学院大学文学部紀要 29 1-13.
- 檜村愛子 2003 「心理学化する社会」の臨床社会学 世織書房
- 川瀬正裕・松本真理子 1997 新自分さがしの心理学：自己理解ワークブック ナカニシヤ出版
- 増田真也・外島 祐・藤野信行・小川正男 2000 対人援助職の適正に関する研究(1) 茨城大学教育学部紀要 49 215-228.
- 松井三枝 2000 はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化——「心の科学」受講前後の調査から 富山医科薬科大学一般教育研究紀要 23 63-68.
- 長尾 博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究 37

(1) 71-77.

斎藤 環 2003 心理学化する社会 なぜ、トラウマと癒しが求められるのか PHPエディターズ・グループ

渡辺恵里子 2003 「心理学化する社会」におけるカウンセリング言説の消費過程分析ーカウンセラー志望者の語りを中心として *Sociology today* 13 60-72.

渡部瑞恵・東海林則子・椿堂由紀 2001 心理カウンセラーを志望する大学生のパーソナリティ特性の検討ー援助規範意識との関連からー 明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要 6 15-23.